

註1、『仏教福祉』第四号（一九七七・十一月）二二頁。

2、拙稿、「仏教社会事業論」（『東海仏教』第三十一輯、昭和六十一年六月、一頁以下）参照。

3、森永松信『仏教社会福祉学』（誠信書房、昭和三十九年四月）四八頁。

4、「近代における資本主義体制の形成にともない、政治的には民主主義、法的には基本的人権の確立によって、市民的人間の主体性と尊厳が主張されてきたにもかかわらず、実は幸福を保障された少数者の階層と、幸福な生活からほど遠い、また全くそれを欠如する多数者の階層の存在という対立が、現実には産みだされるにいたっている。社会福祉学は、このような社会体制に連なる社会福祉の問題を解する課題をまず受けとめて、市民の福祉が欠如する要因を解明し、その障害を排除し、社会成員全体の幸福を守り、かつ向上させるために、諸科学の成果を総合的に活用せねばならないし、社会成員全体の福祉を増進するという要求にも応えようとするのである。」（同、四頁。）「これが人間の『自己疎外』の姿であり、貧困や社会的環境の悪条件に由来する浮浪、犯罪、性的紊乱、少年非行、自殺、家族解体、その他、いわゆる『社会福祉問題』に現われる反価値的諸現象は、基礎的『社会問題』とともに、資本制社会における構造的必然の所産であると考えられねばならない。われわれは、この社会福祉の問題に対応する活動を社会福祉事業と規定したい。」（同、三四―三五頁。）その他、同、二二九、三三、六五、六六、二一三、二三〇、二三五頁参照。

5、同右、二一三頁、その他一〇二、一〇四頁参照。

6、同右、二三五頁。

7、同右、六四頁。

8、同右、二三〇頁。

9、同右、二三〇―三一頁。

10、同右、二三七頁。

11、後の著書『社会福祉と仏教』（誠信書房、昭和五十年九月）では階級的立場を批判している。―註 参照―これによれば、必ずしもマルクス

主義的ではなくなっているようにも思える。

12、『仏教社会福祉学』三七頁。

13、同右、六六頁。

14、森永松信『社会福祉と仏教』二九―三〇頁。

15、同右、一五五頁。

16、同右、一〇一頁。

17、この点については拙稿「仏教社会福祉について」（『東海仏教』第三十輯、昭和六十年六月、五〇頁以下参照）。

18、水谷幸正「浄土教と社会福祉」（『浄土宗学研究』第二号、一九六七、三三〇頁）。

19、『浄土宗学研究』第二号、三一六頁。

20、同右、三二六―二七頁。

21、同右、三二九頁。

22、同右、三二〇頁。

23、『仏教福祉』第八号、一一―一二頁。

24、同右、一二頁。

25、同右、一二頁。

26、『浄土宗学研究』第二号、三二九頁。

長谷川知一教授停年退官の特輯号に、多少なりとも「社会科学」に関係する論稿を草することができ、幸いに思っています。先生との関係からすれば「仏教経済学」に関するものが相応しいかもしれませんが、それは無理でした。創設以来二十有余年、本学の発展のためご尽力頂きましたことを心から感謝いたします。先生は要職にありながらも、常に若い情熱をもって学問研究にもつくされまして。そのご精進振りにはただ敬服するほかありません。先生の益々の御清栄を心から祈念いたします。

な立場からの理論化をめざしているのである。⁽²⁵⁾

仏教思想に社会福祉の実践原理を求め、それを理論的に体系化すること、即ち、社会化の理論をあきらかにすることが仏教社会福祉学だとする。そうだとすれば、水谷氏は仏教に社会福祉の根本理念を求め、さらに社会化の法則をもここに求めているといえよう。

まとめ

以上三氏の仏教社会福祉における社会科学の位置づけを考察して来たのであるが、そこには少なくとも二つの機能があるように思われる。一つは分析機能、他は指針機能である。

第一の分析機能とは、現在の社会福祉問題を分析解明するための道具として、社会科学が有効であるとするものである。この場合、社会科学といっても、そこには一般的な社会科学もあれば、マルクス主義的社会科学もある。したがってそこには社会福祉問題についても多様な見解が出て来ることが予想される。第二の指針機能とは、社会科学が社会福祉実践の為の指針を与えるものであるというものである。孝橋氏は社会問題の分析にも実践指針にも共に社会科学が有効であるとされる。森永氏は社会問題の分析には社会科学が有効であるとされる。実践指針の面では、社会科学による理論の価値は認めているが、それだけでは充分でない「人間不在」をもたらすので、仏教の思想行道を必要とするとされる。水谷氏は社会科学を社会問題の分析の道具としては有用だとされるが、実践指針は

仏教によるとされるようである。

結局、仏教社会福祉における社会科学の問題は、それがどこまで適用されるかという点にある。分析機能までか、指針機能も含まれるか。社会福祉問題の分析解明に社会科学の援用と成果を期待することは一般に認められる所である。しかしこの場合、社会科学を経済学、とくにマルクス経済学に限定することには問題がある。第一、経済現象の分析についてさえ、マルクス経済学以外にも種々なる方法がある。第二に社会福祉問題がすべて経済学的観点からのみの分析で、その全貌を明らかにしうるものでもないであろう。社会福祉問題には経済的問題の外に、人間関係の問題、心理―精神的問題、環境―社会的問題などが関係している。だからここで大切なのは、社会福祉問題をできるだけ客観的に科学的分析を行うことである。

次にその結果あきらかにされた社会福祉問題の因果関係・構造をふまえて、その問題の解決のためにどのように実践して行くかの問題が出て来る。この場合、少なくとも二つの方法が考えられる。一つはストレートに、科学的分析によって示された因果関係に基づく法則に従って実践して行く方法である。これは社会科学の法則に従う方法である。他はその法則に基づく実践そのものについて、さらに吟味・熟考して、その実践の方法を定めるといふものである。この場合には実践者個人の人生観・世界観が重要なファクターとなつて来るのである。人生観・世界観には社会科学のものもあるのだが、それ以外にも多くあるのである。

た生きた社会福祉にはならない。社会福祉の背後に宗教理念が支えられていなければならない⁽²¹⁾とも述べている。また宗教的理念の必要性に関連しては、次の如くにも示されている。社会事業を資本主義体制との関連で論ずることは大切ではあるが、「福祉活動という面からいうならば、その議論は部分的原則であり考えかたであると言わざるをえない。もちろん、現実の社会構造に対する社会科学的な認識や本質的把握をぬきにして、社会事業を語ることはできないにしても、社会事業なるものがおしなべてやはり社会的弱者を対象とし、救貧事業や障害者保護事業に重点がおかれていた現状をふまえるならば、宗教的理念（仏教精神）を支えとする社会活動としての社会事業であつてこそ稔り豊かな実践となりうるのである。」⁽²²⁾さらに社会科学の積極的な関心が次の如く示されている。「福祉活動をめざす仏教者は、現代の人間関係科学ないしは社会科学によって解明されている学問的成果を学習し吸収することに積極的にとりくまねばならない。このことは、仏教の現代化、社会化という課題からいっても必要欠くべからざることである。」⁽²³⁾ここでは仏教の現代化、社会化のためには社会科学が必要不可欠のものであるとまでいっている。しかし、続いて次の如く示している。「さりとしてやはり、たんに社会科学だけで人生や社会の諸現象を説明することはできない。たとえば、国家的エゴイズムをはじめとして個人的なエゴイズムにいたるさまざまな利己的欲望によって生ずる社会問題や、老人とか病人の問題などは、人間そのものの苦悩に関わることであつて科学の及ぶところではない。」⁽²⁴⁾ここには社会科学だけでは充分で

ないことが指摘されている。

以上、水谷氏によれば、社会科学にはいくつかの問題がある。即ち、現象論的アプローチのみで真の社会福祉の理念が確立されるか、科学的アプローチのみで人間的福祉の実現が可能か、人間のエゴイズムに基づく問題の解決が可能かなど。氏はまた社会科学の一科として仏教社会福祉をとらえることをしないといわれるが、これは社会科学そのものを否定するものでも、また軽視するものでもない。すでに見た如く、社会科学の協力の必要性を認め、その積極的意義を認めている。しかし総合的に見て、社会科学は第二義的である。氏の主張の基本は仏教を基調とした社会科学の協力による社会福祉である。あくまでも、その中心は仏教にある。

氏は社会科学の成果を利用し、仏教の現代化、社会化に社会科学の必要なことを説かれるが、具体的にそれが何であるか必ずしも明白でない。むしろ次の発言は社会化の原理を仏教に求めているようにさえ思える。

無我の思想が縁起思想であり空思想である、ということだけではなく、その無我の実践行を宗教的实践として明かすと共に、それがそのまま社会的実践であることを理論化しなくてはならない。それは仏教を社会科学的に解明するということではない。仏教のもつすぐれた思想を歴史社会へ対決せしめ、そしてそれを生成する動的な面において把握することである。すなわち、仏教みずからにおいて生み出されてゆく社会的実践の理論である。わたたくしのいう仏教社会福祉論あるいは仏教社会福祉学とはこのよう

要するに孝橋氏の社会福祉論は、社会政策的局面から分析し、その対象を社会福祉的問題を担う国民大衆とし、資本主義社会の階級的論理の分析から表現している。しかし、資本制社会の諸要素が多様化し、複雑化の過程を辿る現在の時点に立って、たとえ被保護者を中心とするとはいえ、すべての国民に連なる対象性を一貫した階級論理で社会福祉論を構築することについて疑問がある。ことにすべての社会生活をとりえて階級論理でとらえることが、果して妥当であろうか。⁽¹⁶⁾

次に社会福祉実践の指針としての社会科学の役割であるが、森永氏はその実践理論の構築に社会科学が貢献している点もあるが、その結果は「人間不在」という面も出て来ており、実践規範としては、社会科学は充分にその機能を果たしていないと考えておられるようである。そしてそこに大乘菩薩の思想と行道が重要な意味をもつて来るとされる。⁽¹⁷⁾

三、水谷幸正説

水谷氏は自からの仏教社会福祉学を社会科学の一科としてのものではないとされる。しかし、これは社会科学そのものを否定するものではない。社会科学の一科としての仏教社会福祉学をとらないということである。なぜなら、それは充分でないからである。氏は森永松信氏の仏教社会福祉学は社会科学の一科としてのものであり、

学問的方法論としては現象学的なものであるとして、その不充分さを次の如く指摘している。「しかし、このようなことだけでよいとするならば、学問としてはいわゆる現象学的方法論の一面にのみ立脚するものであって、いわば規範的な側面を忘却しているといわざるを得ない。」⁽¹⁸⁾そして現象論に立脚した規範論としての仏教社会福祉論を主張しているようである。

福祉的諸現象が如何なる形においてこの社会に適用されているか。それと同様なことがが仏教的諸現象の中にどのようによりて必要の課題であるが、さらに一歩おしすすめて、仏教的諸現象の中に福祉的諸現象を見出し得る根拠は何か、何故に両者が結合し得るのであるか、を究明し、さらに如何にあらねばならないかを解決しなければならぬ。かくしてこそ、はじめて現象論の上に立つ、規範論としての仏教福祉論が提示され得るのである。そのためには、社会科学としての社会学的方法論（現象論的方法論）を用いると共に、人文科学としての仏教学的方法論（規範論的方法論）を適用しなくてはならないとおもうのである。⁽¹⁹⁾

現象論的な社会科学的方法には一つの欠点があると次の如く指摘されている。「社会的諸現象からの帰納によって諸事象の根底を求めるといふ現象論的ありかたにおいて、はたしてその理念が確立されるであろうか。このことは社会科学を通じての一つの欠点であるとも云えるが、とくに社会福祉学はそのことを特徴的に露呈しているのではなからうか。」⁽²⁰⁾また社会科学としての社会福祉では「血の通っ

で、これを通じて社会科学の位置を考究してみよう。

森永氏は「社会福祉」が「宗教」と「人間科学」という二つの源泉をもって発達して来た⁽¹⁴⁾とされる。その中で「人間科学」に触れて次の如く示している。

社会福祉において、いま一つの主要な源泉とされる「人間科学」について、これはかなりおくれで、社会事業の段階に入つて漸次に基礎づけられたのである。その主要なものとしては、社会学・心理学・精神医学・経済学・政治学・教育学・文化人類学・生物学等々である。これらは基礎的理論に、或はその実践に対してそれぞれ充分役立ってはいない。しかしこの人間科学の敢えていふならば抽象性と一面的な仮定づけによって、重要な部面が捨象され、歪められてきたのである。ことに戦後にいたつて高度の公的性格による専門性・技術性が高められるに及んで、社会福祉そのものにさまざまな逆機能があらわれてきている。即ちその発展過程のなかで、実践面において明らかに官僚主義的傾向があらわれ、外形的機制によって、内容的には「人間不在」の空虚な活動が回転し、理論面においても社会福祉論理の形式的な空転がくりかえされている。⁽¹⁵⁾

ここでの人間科学は一般的にいゆる社会科学よりも巾広いものである。しかし社会科学のものをそこに含んでいることは確かである。これを手がかりとしてこの点での氏の社会科学の位置を考察してみよう。

右の発言から、社会科学をも含めた、いわゆる科学と社会福祉の

関係を見ると、そこにはプラスとマイナスの両面があるようである。プラスの面は「基礎的理論」「或は実践に対してそれぞれ充分に役立っている」という点である。これは社会科学がわれわれに実践のための理論的裏づけを与えるものであるということの意味するものと思われる。またマイナスの面は、実践面における「官僚主義的傾向」「外形的機制」による、内容的には「人間不在」をもたらし点である。これは社会科学の実践理論に従つて来た結果、今日の社会福祉が「人間不在」的なものになってしまったということの意味するものである。

これらの見解からすれば、氏は社会科学に社会福祉実践の指針を認めておられたようで、それなるが故に、現在「人間不在」の社会福祉となっていることを指摘されているように思える。

かくの如く人間科学の影響にはプラスとマイナスの両面があり、そのマイナスの面をおぎなう意味も含めて仏教を強調されるのである。

以上森永氏の仏教社会福祉における社会科学の位置を見ると、そこには現代社会を資本主義社会と見、そこでの社会福祉問題の分析解明には社会科学が重要な位置を占めていることが知られる。これは孝橋氏の見解と大変よく似ている。しかし両氏の間にも相違はある。それは森永氏が孝橋氏のように、資本主義社会における社会福祉問題を全て、「階級的立場」で論じるものではないとされる点である。

を「仏教的な諸現象を社会福祉的な視点において、把握する社会諸科学の一科として成立するもの」としている。⁽⁸⁾

4、社会的側面への関心。仏教社会福祉は単に仏教思想信仰のみでは充分ではない。社会的側面への関心をもつことが肝要である。氏は次の如く述べている。

仏教社会福祉学はその使命を果たす前提として、現在、ここでの資本主義体制下にある諸矛盾の理解と、それらの問題解決にわたる認識を必要とする。もし、この理解や認識の研究を欠くならば、仏教の理想を実現する目標と方策を誤まり、したがって現代に即応する適切な社会福祉事業の性格を失って、時代錯誤的な前近代的慈善事業に復原するに至るであろう。そのため、研究はこの資本制社会と、その社会的基礎条件をなす近代社会の理解から出発されなければならない。⁽⁹⁾

仏教社会事業、もしくは仏教社会福祉事業に必要とする精神的態度において、この菩薩道のほかにさらに、重要とする因子は近代的⁽¹⁰⁾精神と近代資本主義社会体制の実体の把握である。

以上の四点から明らかなように、森永氏は社会科学乃至社会科学の見方が仏教社会福祉に不可欠のものとされる。しかもその社会科学は多分にマルクス主義的社会科学の如くに思える。⁽¹¹⁾それは資本主義の概念に関する氏の見解に見られるが、さらに社会変革についての氏の見解にもこれが示唆されているように思える。氏はいわゆる

社会改良主義理論に基づく社会福祉は、「みな人道主義や連帯思想によって裏づけられているために、資本主義体制の変革を志向するような社会理論として把握されるにはいたらなかった。しかし、社会福祉事業はその機能を遂行する過程において必然的に社会体制そのものがその根底から提起する問題に直面せざるをえない。」⁽¹²⁾としていいる。これは、社会福祉の実現には改良主義では充分でなく、そこには限界があるので、その真の実現のためには、資本主義体制を変革せねばならない、即ち、社会体制そのものを変えなければならぬことを示唆している。氏はまた次の如く述べている。「われわれはすでに、社会福祉的な一切の事象が、資本主義社会において展開されつつあることを知ったが、それらの問題の真の解決は、それ自身一個の歴史的形造物である資本主義社会の歴史的変革とともにあることもまた、そこから明らかである。そのときには、今日の社会福祉事業はそのままの形態ではありえないであろうが、その可能性の考究はまた他日を期さねばならない。」⁽¹³⁾「ここでも氏は歴史的「変革」といつている。これは資本主義体制から新しい体制に変わること示すものである。そしてその新しい体制がいかなるものであるか、その場合の社会福祉事業はどうなるか、ここでは不明である。しかし新しい体制は、先の氏のマルクス主義的資本主義の概念と合いまって考えるとき、それは社会主義体制ではないかとも思われる。

以上において、仏教社会福祉における社会科学の重要性について見て来たが、森永氏にはまた「人間科学」についての論述があるの

会現象の科学的分析解明を指すものではない。氏によれば、社会科学は、現代社会を資本主義社会とおさえ、そこにおける階級間の斗争の事実を認識し、「それらの存在と運動についての因果関係を解明し、法則性を発見する」⁽¹⁾ものである。すべての社会現象、あるいは社会福祉問題を、資本主義社会の所産とし、資本と労働、階級と階級、といった角度から分析解明するものである。そしてこのような社会科学は、ただ単に事実を解明するだけでなく、資本主義社会を変革して行く指針をも与えるものであるとするのである。かくして社会科学は社会的現実の解明だけではなく、同時に指針をも与えるのである。この場合、指針とは、単なる社会福祉の実践の方法としての指針というよりは、むしろ資本主義社会の変革の指針といった方がよいかもしれないものである。

以上、孝橋氏の社会科学についての見解をいくつか見て来たのであるが、さらにこれを要約すると、次の二点になるように思われる。一つは歴史的・社会的認識の重要性、二つには、社会科学とは資本主義社会の批判の学であるという点である。他にもあるが、氏が同学に向けている批判を見ると、こうした視点が顕著である。さらに氏の主張は全般的にみてマルクス主義的社会科学乃至経済学に通ずるものと思われる。⁽²⁾

二、森永松信説

森永氏は仏教社会福祉が社会福祉である以上、社会科学は絶対に必要であるとされる。まずその点を考察してみよう。

1、社会福祉は「歴史的社会的存在」である。⁽³⁾それ故に、それは歴史的・社会的文脈乃至関係において論じられなければならない。これは社会科学によってなされる事柄である。

2、社会福祉は資本主義体制との関係において見られる。社会福祉の問題は資本主義の出現と発展の過程において、その構造的矛盾から必然的に生じて来たものである。⁽⁴⁾従って、これは資本主義体制との関係において論じられなければならない。たとえば「貧困」の問題も、それを個人的怠惰として見るのではなく、社会的なものとして認識するのである。⁽⁵⁾社会福祉事業はこの貧困から派生するものもろの社会的病理現象によるものとさえいえる。⁽⁶⁾また資本主義そのものについて三つの類型をあげる。第一はゾンバルト及びウェーバーによるもの、第二はドイツ歴史学派経済学の経済発展についての図式を継承するもの、第三はマルクスの見解によるものである。この中、第一第二の資本主義概念はその本質をつくものではなく、第三の「マルクスの資本主義概念のなかに、その本質的意義を見出す」⁽⁷⁾ものである。そして氏はこのマルクスの資本主義概念の下に社会福祉の意義を論じている。

3、仏教社会福祉を社会科学の一科とする。氏は仏教社会福祉学

仏教社会福祉における

社会科学の位置

服 部 正 穩

序

一、孝橋正一説

仏教社会福祉は、それが社会福祉である以上、社会科学を無視しては成立しない。即ち社会福祉というのはそれ自体社会的存在であり、それ故にこれは社会科学に基づいて議論されなければならないものである。しかし、仏教社会福祉論の中には、ややもすると、この社会科学を無視して、仏教思想信仰のみによって仏教社会福祉が成立するかの如き議論が見られる。以上は社会科学の側から仏教者に指摘される一般的な見解である。こうした議論に対して改めて仏教社会福祉における社会科学の位置づけについて考究することは意義あることであろう。ここでは仏教社会福祉に関するいくつかの説をあげ、この問題を論ずることとする。

孝橋氏は仏教社会福祉における社会科学の位置を明確に示している。氏は仏教社会事業を二つの面から構築することを提示している。一つは主体的側面、他は客観的条件の側面である。前者は仏教により、後者は社会科学によるものとされる。即ち、外的、社会的な側面については社会科学にまかせるべきであって、仏教が口出しすべきではないというのである。そして社会科学は社会現象の分析・説明と共に、社会事業において人間が具体的に社会的実践をする指針を与えるものであるとする。その指針に沿って社会的実践をし、社会福祉の実現に努めるのである。即ち、社会科学は社会福祉問題の解明と社会的実践の指針の両方を与えるものである。

ここで一つ注意せねばならぬことは、氏の社会科学の概念である。氏は社会科学を単なる価値中立的・純粹客観的な方法による社